

2012年度 非文字資料研究センター 第2回公開研究会

帝国後 海外神社跡地の景観変容 —台湾の事例を中心に—

日 時：2012年12月15日（土）13:00～17:00

会 場：神奈川大学横浜キャンパス 16号館 地下1階 視聴覚B室

開会挨拶：田上 繁（非文字資料研究センター長）

趣旨説明：津田 良樹（非文字資料研究センター 研究員）

報 告：菅 浩二（國學院大学 研究開発推進機構研究開発推進センター 准教授）

中島 三千男（神奈川大学 学長）

津田 良樹（非文字資料研究センター 研究員）

コメンテーター：蔡 錦 堂（国立台湾師範大学台湾史研究所 副教授）

司会・進行：橋川 俊忠（神奈川大学法学部 教授）

『帝国後 海外神社跡地の景観変容』 (公開展示・公開研究会) について

津田良樹

神奈川大学非文字資料研究センターの共同研究プロジェクト「海外神社跡地から見た景観の持続と変容」班は、非文字資料研究センターの公開展示として稲宮康人写真展『帝国後 海外神社跡地の景観変容』を2012年12月11日（火）～20日（木）にかけて神奈川大学16号館ホワイエにおいて開催した。また、この写真展開催期間中の12月15日（土）に『帝国後 海外神社跡地の景観変容—台湾の事例を中心に—』として公開研究会を実施した。

戦前期に「大日本帝国」が海外において植民地化した旧台湾・旧朝鮮・旧樺太・旧南洋群島や旧満洲国を中心とした中国の侵略地に創設した神社が海外神社である。その数は1640社に上るとされているが、敗戦とともにすべての神社で機能は停止し、多くは現地人や日本人の手によって破却された。

公開展示である写真展は、「海外神社跡地から見た景観の持続と変容」班の研究協力者であるフリーランスのカメラマン稲宮康人氏によるもので、氏が共同調査の中、あるいはそれ以前から撮りためた海外神社跡地の景観に関わる写真を中心にすえ、神社時代の古写真を添えたものであった。内容は戦前期に海外で造られた神社で、伊勢神宮を頂点にした神社機構のなかで社格を付与された



津田良樹氏

神社の現在の景観を中心としたものである。研究センターの共同調査として行った台湾の神社跡地調査の成果も反映させ、海外神社を全体と部分の両面から眺めることが意図されていた。さらに、日本国内の戦前期に創建された靖国神社や樞原神宮などを併せて展示することにより、今日の日本社会のなかに潜在している神社と歴史との関係性についても問題提起するものであった。ところが、海外神社の現状の景観写真のなかに国内の神社の写真を混入させての展示は、必ずしも意図を明確に伝えられたかどうか、単純に海外神社のなかになぜ国内神社が混在しているのかとの疑問を生じさせることにもなった。展示の配列やキャプションに適切な工夫が必要だったのではないかと反省される。それでも、マイナーなテーマである上、街中から外れた大学内のホールのホワイエでの開催という悪条件にもかかわらず150名ほどの見学者があった。

なお、公開展示図録は『日本写真年鑑』2013年版（日本写真協会）に収録された。

公開研究会は、國學院大學の菅浩二氏の「台湾神社宮司・山口透と寺廟」、神奈川大学の中島三千男氏の「歴史・文化の三度の造り替え—台湾明延平郡王祠、旧開山神社を素材に—」、津田の「台湾神社から台湾神宮へ」の3本の報告に、コメンテーターとして国立台湾師範大学台湾史研究所の蔡錦堂氏を迎え、法学部の橘川俊忠氏の司会で実施された。

菅氏の報告は、台湾総督府下における海外神社と在地の寺廟の関係についての報告であった。すなわち台湾神社宮司を創設以来36年間務めて1937年に引退した山口透（翌38年死去）の思想と、時期的には山口引退後にあたる1939年に中歴郡守として寺廟全廃計画を推進する宮崎直勝の論理の検討である。山口の引退がいわゆる「皇国臣民化」政策が押し進められるちょうどその時期に当たっているとの認識の上で、山口は終始一貫して在地の信仰すなわち祠廟を尊重する姿勢を持ち続けたとし、その対極に宮崎の寺廟整理を位置づける内容であった（詳細は菅氏の別稿参照）。

中島氏の報告は、鄭成功の廟であった明延平郡王祠（旧）が、開山神社と改変され、戦後明延平郡王祠（新）として復活する変遷のなかに、歴史・文化の創り替えを読み解こうとするものであった。明延平郡王祠の元は鄭成功を祀る開山王廟という現世利益的なものであったが、清王朝のナショナリズムの下にまず明延平郡王祠（旧）が造られた。その明延平郡王祠（旧）が日本の植民地支配の下に開山神社とされた。神社とはなったが当初は建物には大きな改変はなかったが、1941年皇民化ということで日本の神社建築風に大きな改変が行われた。さらに、日本の敗戦後、国民党政権の下で、台湾支配の正当化として明延平郡王祠（新）が再建されるというような内容であった（詳細は中島氏の別稿参照）。

津田の報告は、台湾の総鎮守であった台湾神社から台湾神宮への昭和造替・遷座の様相を『台湾日日新報』などの文献資料により跡付け、さらに現在ではまったくわからなくなってしまった新社殿の様相を古地図・航空写真・現地調査をもとに検討した（詳細は、『年報 非文字資料研究』第8号参照）。また、現地調査により発見した新社殿の遺構である地下神殿（御神体の避難施設）について紹介し、同様な事例が旧満洲国の建国神廟にも存在することなどについて報告した。

これらの報告について、蔡氏よりそれぞれにコメント



コメンテーターの蔡錦堂氏

があった。主なコメントの内容は以下のようである。

菅報告に関しては、宮崎郡守の寺廟整理の評価について、宮崎の狙いは財産目的であり、彼の論理は寺廟整理を正当化する単なる口実であったのではないかとの指摘がされた。

中島報告に関しては、戦後になって明延平郡王祠（新）において神式の儀式が、戦前期に神職の訓練を受けた台湾人によって行われた事実が指摘され、その事実をどう解釈すべきかが問われた。

津田報告に関しては、台湾神社で発見された地下神殿と同様な地下施設が台南県の新化神社でも見つかったとの紹介があり、新化神社は昭和18・19年ごろに造られており、台湾神社や満洲国建国神廟の造営期ともほぼ一致している。時期的に見て、空襲に備えた防空壕のようなもので、この時期の神社には他の神社にもあったのではないかとの指摘があった。

蔡氏からは、以上のほか新たな資料の提示や今後の課題などについての指摘もあり、それらを巡って活発な議論が行われた。また、大里浩秋主任研究員から飛び入りで台湾神社の新出の写真資料の紹介があり、当日参加いただいた元台湾神社宮司山口透の孫に当たられる山口坦氏御夫妻から山口透に関するお話をいただけるなど多彩な内容となった。

とはいえ、司会の橘川氏の締め言葉にあったように、台湾に限ってもまだまだ問題を多く残しており、いまだ一般論として成立するような状況に至っていないことが確認され、海外神社研究の一般論に至るにはさらに一つ一つの神社の実態を解明する努力を積みかさねる必要がある。また、海外神社という日本の過去の姿をプラス面、マイナス面を含めて解明することに大きな意味があると思われる。

なお、公開展示・公開研究会については、『神社新報』（2012年11月26日）や『週間金曜日』で案内記事が



掲載され、公開研究会の当日の様子が『中外日報』（2012年12月20日付）で紹介されるなどの反響があった。

歴史・文化の三度の創り替え—台湾 明延平郡王祠、開山神社を素材に—

中島 三千男

本報告は、17世紀に、明国福建の人鄭芝龍と平戸藩士の田川氏の女（松）との間に、平戸で生まれ、後、大陸に渡り「反清復明」の戦いを起こすが、敗れて台湾に渡り、オランダ人（東インド会社）を駆逐し、台湾において最初の漢人政権を打ち立て、その意味で台湾の「開発始祖」として、今日に至るまで台湾・中国本土の漢民族の厚い崇拝を受けている、鄭成功（1624年～1662年）の死後の廟が今日に至るまで、どのように、その外観を変化させ、その機能を変化させてきたのか、という事の報告である。

鄭成功の死後、台南の「百姓」住民によって小廟祠が建てられ、「延平郡王」（鄭成功の尊称）として祀られていたが、1683年に鄭氏三代の台湾統治が終焉し、清朝の領有化に入ると「百姓」住民は多くを語ることを忌避、以降、廟の名称を「開山王廟」とし、鄭成功を「開台聖王」と蔭称して、「誠心敬」、「心同敬」、「合心敬」という3つの神明会（地域住民組織）を組織して奉祀・運営を行っていった。18世紀の中頃に規模広大なる神殿（125坪）に改められるなど、幾度かの改変を経験したが、基本的にこの「開山王廟」は風水害などを防ぐ台湾住民の現世利益信仰の対象として尊崇をあつめていた。

「最初の創り替え」

こうしたあり方に大きな変化を及ぼしたのは19世紀半ばの東アジアの国際関係であった。1874（明治7）年の、3年前に起きた台湾に漂着した琉球漁民の殺害事件（宮古島民殺害事件）を口実とした、日本の台湾出兵である。日本軍は5月に長崎を出港、日本兵3500人が台湾・屏東に上陸占領した（中国では牡丹社事件）。これに対抗して、清国も同じ5月に、日本軍に圧力をかけるために、沈葆楨を国防及び外交の欽差大臣として3000名の兵士とともに台南に派遣し、日本軍と対峙した。この事件そのものは、その後の北京での外交交渉の結果、その年の12月に日本軍が撤退して解決するが、沈葆楨は同年、台湾に住む人々の願いを酌んで、鄭成功は「明王朝の遺臣であって清王朝の逆賊にあらず」「最後まで節義



中島三千男氏

を貫いて国のために自らの命を捧げ、水害・干害に当たっては天に祈った。台湾に対する貢献は非常に大きい」として、鄭成功に諡（おくりな）を追号するとともに、祠を建てて正式に祀る事を朝廷に奏請した。沈の意図は鄭成功の「忠烈大節」と共に、台湾百姓の「民族大義」の心を振起し、外侮を防ぎ、日本の侵略軍を駆逐することであった。いわば、清朝政府による「伝統の創造」であった。

翌1875年正月10日、清朝政府（光緒帝）は聖旨を批准し、鄭成功に「忠節」の諡を追号するとともに、鄭成功の専祠を勅建し、国家の祀典に列し、春秋2祭を行うことを決定した。沈はこれに基づき「開山王廟」を改称して「明延平郡王祠」（以下、旧を付す）とするとともに、廟を新築し、社地も672坪と拡大した。これが最初の「創り替え」である。

「二度目の創り替え」

清朝政府によって、まさに日本の侵略を防ぐために、台湾住民の「民族大義」を振興する目的をもって建てられた「明延平郡王祠」（旧）は、日清戦争後、皮肉にも、日本の統治を正当化する台湾の最初の神社に改変される。1896（明治29）年、台南県知事磯貝静蔵は鄭成功の忠烈と母親田川氏の貞烈（鄭成功の功業に和して大陸に渡ったが、清朝に服することを拒否して自害した）を讃え、総督桂太郎に神社創設を建議した。これを受けて翌年、総督府は県社開山神社の創設を許可、ここに「明延平郡王祠」（旧）は県社開山神社と改称された。日本人の母親を持ち、日本の平戸で生まれた鄭成功は、日本人の台湾統治を正当化するシンボルと読み替えられたのである。これが、「二度目の創り替え」である。

しかし、県社開山神社と改称されても、結構は「明延平郡王祠」（旧）を利用したため、福州式の三進双護龍主建築といわれる、中国の伝統的な廟建築様式のままであった。変化といえば鳥居が新しく付け加えられただけ

であった。この結構に大きな変化があったのは、まず、1910（大正4）年の大改築であった。鄭成功（延平郡王）を祀る前殿（本殿）の前に、日本式の拝殿を新設、また社務所、浄手処（手水舎）、神職宿舍、歩道なども新設され、華表（鳥居）も移設された。境内もこれまでの十数倍の9400余坪に拡大された。こうして開山神社は旧来の延平郡王祠（廟）と日本式神社建築の「合一」の建物となった。さらに、こうした廟の神社化を一層推し進めたのが、1941年の大改築である。台湾において1930年代後半以降、1940年代初頭まで、皇民化政策の一環として、在来寺廟の統廃合（「寺廟整理運動」＝台湾版廃仏毀釈運動）が進行したが、こうした背景のもと、創立40周年を前に、また将来官国幣社への昇格に備えて、新たに、流造の本殿と幣殿・拝殿を神廊でつないだ新社殿が新築され、純日本風の社殿が完成した。ただし、従来の前殿（本殿）等の建物は破壊されず「記念物」として残されたため、外見的には廟と神社の「合一」、「二重性」は尚残されたが、理念的には開山神社の神社化が「完成」したのである。

「三度目の創り替え」

1945年8月、日本の敗戦、台湾の植民地支配が終焉するとともに、県社開山神社は再び明延平郡王祠（新）に戻される。国民党政府は日本統治の痕跡をなくすために、日本式の建築をなくす政策をとる。開山神社と改称して以降、1941年に新築された新社殿の撤去などが行われるが、この日本統治の正当性を象徴する開山神社から明延平郡王祠（新）への回帰を象徴するものが、鳥居の改変である。

1947年、鳥居の笠の部分及び開山神社と書かれた額が取り外され、代わりに国民党徽・晴天白日徽と「忠肝義膽」と書かれた横書が掲げられた。この「忠肝義膽」の横書は、1947年の国民党政府による台湾住民の虐殺事件である「2.28事件」の後、蒋介石から「來台宣撫」の任を帯びて南京より呼び寄せられた、白崇禧国防部長（国民革命軍一級上將で「小諸葛」の称を持つ、抗日名将であり、また著名な作家白先勇の父親でもある）の手になるものである。

また、その後、これまでの曲線が優美な福州式建築は「講求氣勢」の北方式建築に改築され、本殿や三川門など、開山神社時代にも残されていた、明延平郡王祠の歴史的建築物としての価値は失われてしまった。これが、「三度目の創り替え」である。

このように、開山神社は、歴史的には鄭成功を祀る私廟としての「開山王廟」が、1875年に日本の台湾出兵に対応して、台湾人の民族的大義を振起するための、清朝の国家的廟「明延平郡王祠」（旧）に改編される（「最初の創り替え」）。ところが、日清戦争後台湾が日本の統治下におかれると、鄭成功が日本人の血を引くことが最大限に利用されて、日本統治の正当性を象徴し台湾の民心を収攬するために、台湾における最初の神社・開山神社に改編される（「二度目の創り替え」）。しかし、これも、日本の敗戦後、台湾に入ってきた国民党政府によって、大陸反攻のシンボルとして、「明延平郡王祠」（新）として復活する（「三度目の創り替え」）。

17世紀の末に建てられた、鄭成功を祀る宗教施設が台湾を統治する中・日の政権によって、3度の読み替え、「創り替え」が行われて今日に至っているのである。

本報告は、以上の流れを報告すると同時に、研究史的には「最初の創り替え」の意味がこれまで、十分に位置づけられて来なかったこと、また「三度目の創り替え」が行われて以降、現在においては「明延平郡王祠」（新）は「大陸反攻」のシンボルとしてより、台湾における文化財・観光資源としての位置づけが重視されているが、その変化、を特に祀られている鄭成功像にも着目して研究する事の重要性を指摘した。



全体討論で会場からの質問に答える報告者とコメントーター



全体討論の様子



「台湾神社宮司・山口透と寺廟」

菅 浩二

発表者はこれまで、中島三千男先生をはじめ諸先学の業績に導かれながら、主に台湾総督府および朝鮮総督府下の神社について、特に祭神に注目して研究対象としてきた。『日本統治下の海外神社』（弘文堂、平成16（2004）年）を上梓してのちは、宗教と近現代ナショナリズムの関係一般というより幅広い構図に近代日本の事例を位置づけ、更にその中に大日本帝国の植民地神社の事例を置きながら解釈を進めるべく、試行錯誤を続けている。

本公開研究会の主題は「海外神社跡地の景観変容」であるが、発表者の関心は「景観」ではなく、祭神への信仰・思想、およびそれによりもたらされる社会的な統合様態にある。それゆえに本発表が会の主旨に合うかは不安ながら、以下に台湾神社宮司を36年間務めた山口透（安政3（1856）～昭和13（1938））の生涯と思想とを一つの軸として、台湾総督府下における神社と在来信仰の関係について述べてみたい。

植民地の神社を「国家神道の海外進出」と説明した最初の研究者は、明治末より日米開戦直前まで日本に住み、宣教師・教育家・宗教学者として活躍した米人D・C・ホルトムである。ホルトムは、日米戦争中の著書Modern Japan and Shinto Nationalism（1943、邦訳『日本と天皇と神道』昭和25年）で、国家的要請のもとに世界主義を指向する神道の将来を制約する三つの要因として、以下のように述べる。

「一、誠の神髓は政府に従順である所に成立つという、政府によって導き出された理論

二、国家主義的膨張の過程は、被征服国民の完全な同化を随伴しなければならぬという考え

三、神道と政治とは不可分であるとする両者の関係」

ホルトムはこうした海外進出の実例として、台湾での「神道の儀式にはかならず参加するように、また各家庭にはかならず神棚を設けさせる」との政策を挙げている。

ただ、当時の欧米研究者で神社参拝強要等の問題に最も関心を持っていたであろう彼も、植民地での同化政策と神社の関係については、1930年代後半以降の実例しか挙げていない。宣教師の報告書などその他の歴史資料も、植民地において神社参拝が前面に押し出され、信教の自由が圧迫されるようになるのは、1930年代半ば以降のことであることを示している。この時期はいわゆる「皇民化」期としても知られるが、ちょうど台湾神社初



菅浩二氏

代宮司・山口透の引退（昭和12年）および翌年の死と時期的に重なる。

台湾神社とは、明治34（1901）年10月27日に、台湾総督府下の総鎮守として台北市に鎮座した神社である。社格は官幣大社で、祭神は大国魂命・大己貴命・少彦名命の三柱一座と、近衛師団長として「征台の役」に出征、台南に風土病に斃れた北白川宮能久親王一座の、四柱二座である。昭和19年6月17日に天照大神一柱一座の増祀が発表され「台湾神宮」に改称しているが、昭和20年の日本敗戦に伴い廃絶した。山口はこの総鎮守存続期間の約四分の三の間、宮司職にあつて、台湾神職の指導的立場にあつたことになる。

福井藩士族に生まれ、明治5年に上京、儒学者・林鶴梁の塾で学び、次いで伊勢の神宮教院本教館を経て教員となった山口は、日清戦争後に従軍布教師として神宮教より、大連湾そして台湾に派遣された近衛師団に従っている。大連湾では日本新聞記者・正岡子規との邂逅もあった。そして台南で能久親王の病氣平癒祈願を行った従軍神職も、山口その人である。彼はこうした経験から、台湾神社創建に際し、初代宮司に抜擢されたものとみられる。延平郡王祠（鄭成功廟）即ちのちの開山神社の学術調査を、初めて行った日本人も彼である。

台湾を南進する近衛師団における回顧談として、山口は以下のように述べている。

「これも彰化での事であるが、兵士たちがその地の孔子廟に寝泊まりする際、孔子や顔氏等の成人の像を取り出し、それを枕にして泊る者があつた。私はそれを見て、台湾人が此の事を聞いたら何と思ふだろうと、それは止めて貰ひたいと将校に願つて止めさせたこと等があつた。」（「山口宮司の領台回顧談」『台湾日々新報』昭和10年6月17日号 井出季和太『南進台湾史考』誠美書閣 昭和18年に再録）

山口は漢学の素養によるものか、在来信仰、特に「祠廟」に対する敬意の必要を熱心に説く人物であつた。明



会場の様子

治 41 (1908) 年に鄭成功廟は部分的に神社風に改編されるが、彼はこの時以下のような意見書を当局に提出している。

「祭祀には其の国に各典型あり、孔子を祭るには積奠の儀を以てし、仏陀を礼するには三宝の式を以てす、是れ礼なり、若し礼儀の外に出で、崇敬と同化とを図るは妥当ならざるべし。要するに今日の開山神社は、本島人は更なり。内地人も其の帰向に迷へるは事実なり。聞く今や祠堂修築の議ありと。然らば此の期に於て、宜しく祠廟の古制に復し、其の祭儀は文武廟に於ける如く、一に古礼に基づき、殿堂門廡過べて其の旧觀に復し、敢て変更せず地方の名祠を崇褒せしむるを主とせられなば民心初めて安んじ、王の靈亦必ず首肯せらるべし云々」(「神社と祠廟」(中)『皇国時報』昭和 8 年 2 月 11 日号)

山口の祠廟尊重の姿勢は、宮司在任中一貫しており、晩年も以下のように述べている。

「神社は建国以来、日本民族の伝統的尊信せる国家の宗祀なり。祠廟は革命漢人種の時代的崇仰せる国家の通祠なり。右は歴史上其の体面を異にせるも、結局国家的正義人道に基づき、謂ゆる東洋道徳の精粹に帰著せるは同一にして、彼の欧米諸国の個人主義、唯物偏重より成立ちたる社会道徳とは、初めより其の出発点を殊(ママ)にする者あるは、固より論を俟たざるなり。」(「台湾に於ける神社と祠廟」台湾神職会機関誌『敬慎』昭和 9 年 12 月号)

台湾総督府施政開始と同時期に、山口らが提出した「神宮教台湾布教願」と、昭和 19 年の台湾神宮号への改称時の「内務大臣謹話」を読み比べてみよう。前者で宗教として布教意義が説かれる皇祖神信仰について、後者では、内務大臣が「近時」島民の「敬神ノ念亦益々威烈ヲ加ヘテ参リ 皇祖天照大神ニ対シ奉ル崇敬欽行ノ念ハ湧然トシテ興起致シタ」と、「非宗教」的にその流布達成を宣言する。両者の間には皇祖神信仰の質的転換があり、山口の後半生がある。無論、山口が如何に台湾神社界の

有力者であっても、彼一人の死がそのような質的転換をもたらした訳ではなかろう。しかし晩年「従軍遺老」と称した彼の死は、「歴史」としての台湾開拓が年を重ね、歴史に先立つ「神話」としての「征台の役」を知る世代が絶えつつあることを象徴していただろう。そしてこうした世代転換は、皇祖神信仰また神社と在来信仰の関係の転換をも象徴しているのではないか。

「皇民化」期の、地方庁主導による在来信仰圧迫の顕著な事例として知られるのが、本日もご参加の蔡錦堂先生が研究された「寺廟整理」である。多少特異な例ながら、昭和 14 年に、総督府の制止すら振切る形で中壠郡守として寺廟全廃計画を進めた、宮崎直勝の論理を見てみよう。

「諸君を日本人として守護する神、これは日本の神でなくしてなんでありませう。寺廟の神は即ち日本の神であります。…しかるに民族のみ神におくれて、いまだに真の日本人になりきれぬとすれば、神に対して申訳もない次第であります。…即ち寺廟廃止は諸君の神の意思の命ずるところであります。」

「寺廟神が宗教神であることは疑ひの余地がない。とすれば宗教神と神社神とを混同して合祀するといふ思想は正しいかどうか、学説なり研究なりでなく、僕達地方官がこれをとりあげて民衆を指導することについては大きな責任を感じるのだ。」

(『寺廟神の昇天 台湾寺廟整理覚書』東都書籍 昭和 17 年)

「神社神」と「宗教神」の語も見えるが、ここには「神社非宗教」により「宗教」を回収しようとしつつ、結局果たせない状況が示されている。更に、「祠廟」と「寺廟」とでは微妙にずれるものの、ともあれ在来信仰に対する態度としては、この山口の見解と宮崎の論理は転倒関係にあるといえよう。

即ち、多様な祭祀の共存並列により「帝国」の祭祀空間成立を考える山口に対し、宮崎は同化統一された祭祀空間内でこそ神々が共存する、と見なしている。前者では結果と考えられた「帝国」の祭祀空間が、後者では前提条件ととらえられているのである。この間には、〈国家が生き延びるための戦争動員〉から〈戦争動員に備えた効率的国家作り〉に転じた、総力戦体制構築による社会変容と同じ構造転換が存在する。このような、総力戦とシステム社会と多民族帝国、という観点からも海外神社の問題を考察することで、更に様々な分析視角を得るべく、努力していきたい。